

# 第34回 校長・理事長・総長管区長の集い

ともに歩み、橋をかける

—新しいカトリック教育の可能性—

## 分科会記録

2022年4月28日（木）—29日（金・祝）

日本カトリック学校教育委員会

## A グループ（中高校長）

---

### <校長職に就いて分かったこと>

- ・ 全員一致の意見：校長になって「立場が変わると見える世界が変わる」ことを実感している。
- ・ 大勢の人たちの前で、まとまった話をする機会が増えた。自分の言葉で、カトリックの使命を果たしていきたい。
- ・ 校長就任以来忙しい日々を送ってきた。集いに参加して、全国に大勢の仲間がいることに気づくことができ、勇気をもらった。安心できた。
- ・ 伝えたい聖書のメッセージを意識しながら、校長職を果たしていきたい。

### <アイダル神父様の基調講演から学んだこと>

- ・ 教皇フランシスコが長く教育畑を歩まれた人だと知った。
- ・ 教皇の教育観を学ぶことができた。
- ・ 「他者を中心に据えた世界観」を教職員たちと共有したい。

### <若松先生・山本先生の対談から学んだこと>

- ・ お二人の切り口が心に響いた。
- ・ 「人材」は人を材料扱いし「〇〇に役立つ人」の意味。カトリック学校は「人を育てる」との指摘に共感できた。
- ・ 教育への向き合い方を教わった。基本に立ち返る機会を頂いた。

### <今回のテーマ、次回以降に期待すること>

- ・ 学校の置かれている状況は様々かもしれないが、すべての学校に共通するテーマが選ばれていて、今回参加してよかった。
- ・ 「カトリックの人間観」について、いかにわかりやすい言葉で伝えることができるか？
- ・ 「ともに歩む」とは、「神が共にいてくださる」＋「仲間がいる」ことを忘れずに歩んでいきたい。

### <司教様より>

- ・ 「理事長に就任することになった経緯」をお話くださった。
- ・ 「教員採用について」シスター方は「従順」を第一に採用を決めてこられたことがよき遺産となり、しつけの美しさ、礼儀正しさ、カトリックの良さとして息づいている。「長い伝統」に「創造」を加えて新たな伝統を築いていきたい。
- ・ （記録者感想）現場の先生方の危機感に応えて、司教様ご自身が学校の存続に奔走くださったお話を伺い、参加者一同、勇気づけられました。

### <その他>

- ・ 現場から修道者がいなくなる中、「ミッションスクールとして学校を存続させたい」との教職員の強い願いにより、私（修道女）が母校に派遣され、女子校として存続することになった。
- ・ 校長の使命は負の遺産を遺さないこと。
- ・ 校長の大切な使命は「生徒を集める」「よい教職員を集める」こと。

## B グループ（中高校長）

---

### 1. 自己紹介

（各出席者の経歴と、講話の感想などを一言ずつ述べた。講話の感想のみ記録）

- ・ シスター達が築いたものを「変えてはいけないもの」として、今後どのように活かしていくかが課題だと考えている。
- ・ 信徒でない自分が校長となりキリスト教信仰をどのように発信するか悩んだが、若松先生の示唆「建学の精神を発信していくこと」によって救われた。
- ・ 自分の学校は県内唯一のカトリック学校なので、県内の周囲の方々に、カトリック教育の意義を理解共感してもらうことを大切にしていきたい。

## 2. 講話の提示したポイントをふまえて（フリートーク）

### [カトリック学校ということについて]

- ・ カトリックについて、もっと遠慮しないでアピールしてよいのではと考えている。
- ・ 教員にはほとんど信徒はいないが、生徒が校内の聖堂に通っていることに刺激をうけて教員も何人か通うようになった。身近に祈りがある雰囲気を広げていくことに、校長としての役割がある。
- ・ 生徒たちは（在学中ではなく）卒業したあとに「良い学校だった」と言ってくれる。在学中に言ってくれば生徒募集にもよいのだが。
- ・ 学校では一日の始まりや昼などに毎日放送で祈りをする。一方で祈りの時間を設けていない学校（男子校）もある。
- ・ 祈りの時間を設けている学校は、校長が教員を指導（「放送中に先生は教室で板書などしてはいけません」と校長室で直接に注意した）すると、そのあと教員が祈りに対してとてもよくなった。
- ・ 習熟度クラス編成にすると、できる子ができない子に教える機会が少なくなってしまう。
- ・ 勉強ができなくても「自分は大切にされている」と生徒が感じることで、それはイエスの人々に対する態度であった。カトリック学校は「できる子だけが大事にされている」と生徒に思われる学校であってはいけない。先生ができる子だけ大切にすると、生徒はそれを感じ取る。
- ・ 生徒たちには愛することの大切さとともに、カトリック学校ではむしろ自分が愛されていることに気づいてもらえるようにすることが大切。とはいえメンタルに問題がある生徒とどのように関係を作るかが課題。場合によっては寄り添う先生も一緒に苦しくなってしまう。どのように寄り添えるか。

### <通信制について>

- ・ 定員の一角が入学後に転出してしまいう本校の現状をふまえ、全日制のスピードについていけないから通信制課程を設けようかと検討している。校内に通信制課程を設けておくことで、そこからいつか校内の全日制課程に戻れるようなシステムを作ろうと思う。
- ・ 通信制を併存する学校が多くなっている。自校の通信制に移って卒業できることを目指す学校。
- ・ 前任校では、通信制を設けることに対して教員の間で賛否両論があった。反対意見は「学校のブランド価値が下がる」ということだった。しかしそれに対して「もし反対ならどうぞ別の学校にいでください」と説明したが、結果として誰も先生は辞めなかった。
- ・ 保護者も最近ではあまり全日制にこだわらなくなった。たとえ校内の通信制に移っても、そこで教員と生徒との人間的なつながりが続くことが大切。

### <宗教と道徳>

- ・ 公立学校では、徳育といっても宗教を除かなければならない。道徳に宗教は収まりきれないが、宗教は道徳を含む。
- ・ 「宗教教育」ではなく「宗教について考える教育」であっても、生徒は自分をふり返って考えると思う。

### <終わりに>

- ・ 今日のこの分かち合いのような集まりは、年に一回は必要です。とても有意義です。

## C グループ (中高校長)

---

### <基調講演についての感想>

- ・ アイダル先生と若松先生…山本先生の対談を聞き、「弱さ」というテーマが共通しているを感じた。強さや良い成績を取ることのみが評価される風潮のなかで、他者よりすぐれた人材を育てるのではなく、カトリック教育の本質をどのように伝えるかについて深く考えさせられた。

### <現在 問題と感じる点>

- ・ 現在、他のカトリック校とのかかわりがほとんどなく、生徒同士の交わりもない。また、教会とのかかわりもない。ゆえに、情報も入ってくるのがなく、連携をとることが難しい。  
(提案)  
→全国で学校を越えての「カトリック祭」のようなものが工夫できれば良いのではないだろうか？
- ・ 同窓会の絆は強いが、やや内向きの傾向がある。同窓生は外に働きかける宣教師であるという認識を伝えてゆきたい。信徒を育てて、協働者とするのもカトリック校の使命なのではないだろうか？
- ・ カトリック校でありながら、保護者会なのでは、一番大切なことをストレートに出せない難しさがある。キリスト教学校でしか学べないものは何かについてを、伝えて行くにはどうしたら良いのか？
- ・ コロナ禍のオンライン教育において、困難と共に、対面で会うことの価値を再発見することができた。どうしてもオンラインでは与えることのできないものがあることに気づかされた。特に海外でのエクスポージャーなどで他の文化を知る体験など。  
→ただそんな中でも、フィリピンとのオンライン交流を試み、それなりの成果をあげることができた。

### <要望>

- ・ 若松先生・山本先生の対談を教員にも聞かせたいので、なんとか動画の形で配布して欲しい。  
(全員の参加者からの強い要望でした)

## D グループ (中高校長)

---

- ・ 建学の精神を受け継ぎたい。進路指導との関係。「人材育成」ではなく「人格を育てる」という言葉にハッとさせられた。
- ・ 入試広報室に長く在籍していた。高校単体のカトリック女子校であった。「宗教とは…?」「女子校は怖い」と子どもたちは言うが、母が女子高育ちだとむしろ応援団となる。「女子校」は逆にジェンダーフリーであると感じる。今回の講演を通して、「カトリック」や「女子校」は強みではないかと、改めて感じた。
- ・ 説明会や(学校の)パンフレットにはシスターの姿があり、話の元は聖書。「カトリックの女子校」という私たちのアイデンティティを伝え、同じ話でも繰り返し継続して伝える。修道会の力不足を感じる。
- ・ アイダル師、若松先生、山本先生のお話しが力強く、励まされた。ベースになることをはっきりと堂々と述べてくれた。(私たちの修道会は)4人のイタリア人が中国、シンガポールを経由して日本で宣教活動を始め、70周年になる。「神様が呼んでくださった」「できることを精一杯しましょう」「できないことには助けを求めましょう」という言葉を大切にしている。高校は自己評価制を取り入れているので、弱さを認めて現実に向き合うことが必要。本校の教育方針は全人教育—社会に貢献できる人を育てること。そのためには心が強くなければならない。「全人教育」とは、自分にはミッションがある、と子どもたちにも、先生にも気づいてもらうこと。これは変えてはいけない。「貧しい人々のはしため」というのがカノッサ会の活動。その流れで、不登校や別室学習をしている。
- ・ ミッションスクールの魅力、力を教えていただいた。プロテスタント校にいたが、人生をかけたシス

ターの姿に。SGH（スーパーグローバルハイスクール）申請で考えた「グローバル人材」とは何か…。18歳から成人となるが、知識だけでなく、何が 필요한のか。イエスの生き方を通して、手本を伝える大切さを感じている。今の学校の使命は「進学」なのか。利益を求めると日本の文化になってしまっている気がする。通信制課程の子どもについては、同じ校舎、教室で「一緒にしてみたい」という気持ちを大切にしている。AIの進化について、人は何をしたらいいのかと思うが、これこそカトリック校の出番だと思う。

- ・ 共学化により定員を210名から50～60名にした。感受性の豊かな時代に男女とも。進学コース（国公立）、特進コースに分けているが、一人ひとりの多様性を生かし、個を育てられないか。定期考査を無くした。分析、評価を生徒にさせている（観点は先生から伝える）。これにより「自分には何ができるか」を考えてほしい。IB教育については、評価が難しいと感じた。昨年、学内の司祭、シスターがいなくなった。10年後を思うが、「精神」は生きているので、受け止め方と出し方が大切。
- ・ 「主を畏れることは知恵の初め」神学部を持っている大学がここに参加して、中高の生徒に語ってくれたらと思う。関西学院大阪インターナショナルスクールは関西学院というバックボーンがあればこそ。
- ・ 姉妹校がオーストラリアにあるが、共学化するらしい。学校単体で考えるのではなく、世界のカトリック大学とどうつながっているか、「つながり」が魅力になると思う。
- ・ 姉妹校は世界に500校ほどあり、交流できないことはない。
- ・ スペイン全土に学校があり、統合ネットワークがあるが、日本にはない。持っている理念を共有していけたらよい。

#### <来年以降について>

- ・ 弱い立場の人をどのように受け入れるか（例：通信）
- ・ 教会、地域との連携の実践報告
- ・ 単体...高校大学をきっかけにできないか。海外も視野に入れて。
- ・ 大学の先生

ともに歩み、橋をかける

## E グループ（中高校長）

#### <アイダル神父様の基調講演について>

- ・ カトリック校として、人々のためとなる教育精神の大切さは重々わかりつつ、受験の輪切りに悩んでいる。「他者」からスタートする師の考えに共感。
- ・ 弱い立場の人々・生きている世界のことを生徒に考えさせることに共感。
- ・ 自信と励ましをいただくお話しであった。
- ・ 中学から高校までは望めば進学できるようにしているが、高校で進級できない生徒の存在に「一人一人を大切に」のメッセージとの矛盾に苦しんでいる。
- ・ 小規模校で進学実績に少々見劣りがする現実に悩んでいる。
- ・ カトリック校として自信を持っているが、周囲にどう伝えるかが課題。世間のニーズとの葛藤。
- ・ 建学の精神を出すよう校長の立場を賜ったはずだが、宗教的なものを前面に出すと来てくれない苦しみがある。
- ・ 浅い世界に生きていないか。生徒には響くが、保護者に伝わらない。
- ・ 理想と現実の相矛盾をどう乗り越えていくか。
- ・ 緩和社会。甘やかされ期待されているタイプの生徒が入学して来る。面倒くさい関係を面倒くさからないようにしなければ。
- ・ なぜ大学に行くのか。人の痛みをわかるよう、他社のためになるよう、他人に寄り添う、これらが「きれいごと」＝「緩和」にならないようでありたい。

- ・ 進学実績を上げようと始めたが「うちはカトリック校なので」と言われた。
- ・ 社会で成功することが聖書に反するものでないはず。エリートも社会に必要。他者への思いやりというマインドセットをもった人間に。男子校である故、大学にこだわる傾向。
- ・ 40代半ば以下の教員が進学実績にこだわる傾向。さみしい学校と改めて思った。
- ・ 本校は青少年の育成が大切と修道会がつくった学校。世の中を変えるには教育を変える校名通り「導く星となれ」。
- ・ 社会のニーズがあっても堂々と建学の精神を言っただけでいいはず。しかし、賢い子が入学するわけではなく辛い思いもある。

#### <若松先生・山本先生の対談について>

- ・ お一人ずつ単体でのご講話を伺いたいほどであった。
- ・ テンポの速い展開に着いていくのが大変だったが、我々が思っていることを代弁して下さったよう。改革をしようとしている今、もっているものをよいものとして自覚し、良さの学び直しをしたい。
- ・ 伝統は、新しくないが古くならないものでもないことに感銘をうけ、勇気を戴いた。
- ・ 少子化にあって、新しく頑張るぞ！で競争している感じ。50年間オーナーは外国人司祭、穏やかな校長時代の次の自分。卒業式のパフォーマンスなどハビトゥス。脈々と受け継がれているものに原点あり。校風は守るものでなく、大事なものは継承されていくのでは無いか。
- ・ ハビトゥスということばに、どのカトリック校に行っても共通に感じる雰囲気を感じ共感した。
- ・ 最後に言われた「弱さ」「きわめてよかった＝美しい」が心に響く聖句と言われたことに感銘を受けた。
- ・ もっと足下を掘って、今すでにあるよいものを大切に。肯定されたような勇気や喜び励ましをいただくお話しであった。
- ・ 選ばれない学校である。しかし塾から校風としてよい物があるとわれ、「よい教育をしている」と言われた。よいものを持っていながら、伝えていないのが問題。
- ・ 学校探検と校長のフリートーク。10分で引きつけてほしいと言われる。カトリック校は上品だから売り文句としないのではないか。
- ・ 高三生徒が幼稚園生や小学生、中高の後輩に建学の精神を語る会、そして幼稚園お受験塾や小学校受験塾に母校でいかに育ってきたか語る会は、有効。
- ・ 募集を他校は始めている。本当のことを言う勇気がある。「嫌われなさい」と促されているかのよう。
- ・ 生徒減がすさまじい。先の高三生徒の取り組みをやってみよう。
- ・ 弱いときこそ強い。その人がその人であればすばらしい。しんどい思いの先生方に昨日の話を聴かせたい。先生の中の成果主義（失敗しないか、上手く出来ない、メンタルをやられてしまう）職員集団のことを考えながらお話を伺った。
- ・ 北九州は公立中高志向が強い。私立の生徒は別の輝きを持っているはずがナンバーワンは県立高校。シスターの高齢化もあり、募集は底を打っていた。先生方の雇用問題もある。その人がその人になる教育を貫けるか。塾との関係を大切にす傾向あり。その中、112年の歴史で女子の制服をリニューアル。失敗しないか案じたが、生徒に投げかけ 改善を諮った。このことをきっかけに教員室が変わった。軸ができた。制服委員会がきっかけ。学校の雰囲気も変貌を遂げた。生徒も増えた。地味であってもコミが大切。
- ・ 学校評価委員会（評議会）の雰囲気も変わった。

#### <有馬先生と下村先生の事例報告について>

- ・ プランが浮かんだらアクションを起こすようにしている。PDCAサイクルを機械的にまわしては、改善がみられない。アクションを起こしながら評価している。SGHへの指定の折、その前のSSH（スーパーサイエンスハイスクール）の指定の折りに「終わったらすべてが終わった」反省を生かし、SGHが終わる前に何かを。そうして生まれたのが探究プログラム。学び方を学んでいる探求生は成果が出せずともそのプロセスを経ているので合格をいただける。キャリアプログラムもライフキャリアとして実施。探求の成果はその子が自信を持つようになるところで表れる。連携は大学と研究の熱量で決

まる。何かがきっかけで出来ればよく回る。プロセスが大切。九州の私学は上手くいっているところは少数。

- ・ 話題はIB教育であったが広く話されたことがよかった。7つの力を取り入れている。
- ・ IBの先生も毎月勉強会をしている。努力が必要
- ・ IBを建学の精神に結びつけているところに共感と安心感を覚えた
- ・ IBとは海外の学校に行くシステムとしか思っていなかったが、目が開けた。今はどん底の状態。皆様、すばらしい。
- ・ 頭がパンパンである。下村先生のパワーは凄い。現場の先生方のサポートを受けながらであろう。今までであったもの+αをあの枠組みに入れることで明確化する。権威付け。「うちの学校は良い学校=バカロレア」といえるのは嬉しいが、勉強不足。
- ・ アセスメントOFでなくFORまたはASが興味深かった。まず研修というよりも聴いてもらう、聴いてあげよう…の形。コロナのおかげで先生方の研修もない…という意識。教員も生徒も同じではないか。
- ・ 週1回初任者研修を実行。新人を二分して、二年目は各部会に分かれ週一回実施。カトリックの価値など。
- ・ 教員の成長が大切。生徒理解ができない教員は自己理解ができていない。
- ・ 採用し勤務して2~3年でテストを実施している。

## F グループ (大学学長)

---

### 1. 人材？人間？に関する議論が盛り上がったので、主な意見を以下にまとめる。

- ・ 講話の中に「人材」でなく「人間」という話があったが、解釈と表現の仕方によって誤解を受ける。やはり学生も保護者も社会の役に立ちたいと思っている。「人のために」技術や能力を身につけるという意味で使うなら「人材」という言葉は使ってもいいのではないか。
- ・ カトリシズムの人間教育だけでは学生が集まってこない。現代社会の求めることにも応えなければならぬ。
- ・ 学生が社会の役に立つ人間になりたいというニーズに答えるのも教育者の責任である。
- ・ 人材論も大事。世の中と対話できなくなる。
- ・ 人材を育てるか、人間を育てるか、という問いに疑問を感じる。そもそも人間ができていないと技能も身に付かない。技能を求めることは人間を育てることを放棄するわけではない。特殊な資格がなくても、学生は社会の中で役割を担いたい。それは他者への貢献でもある。
- ・ 人間教育と社会の中で役立つ人間を育てるということを両立した表現ができると良い。そのために、このような集まりが機能すると良い。
- ・ 両者は矛盾しない。
- ・ 看護師や栄養士などの資格を取得できる学科なので、その資格の勉強だけでなくカトリックの精神を学べるのは他の学校とは違う利点となっている。その人が幸せになっていく糧を持たせてあげたい。キリスト教の根本的な教えは学生に入りやすい。カトリックは狭い意味での「人材」を育成しているのではない。
- ・ カトリック教育そのものの体系を話し合える場を求めている。高校の校長と大学の校長でそれについて話し合えたらエキサイティングになると思う。

### 2. その他、講話の中から考えたこと

- ・ 講師の選出が面白かった。
- ・ 他者優先というのはレベルの高い倫理だ。子供の成長発達段階に応じて、自分を大切にすることから始めていくことも必要。

- ・ 他者優先という高い倫理は神父様だから言えることで、信仰を持っていない者には言えない。
- ・ カトリック神学の徳論から説き起こしてくれたのがよかった。その歴史の中の異文化を受け入れる寛容さや柔軟性など、カトリックの懐の大きさを見直し、今にも有効だと納得できた。
- ・ 「決然と弱者を擁護する者を育てる」、創世記の「誰もが美しい存在」というカトリック教育の人間観を聞くことができてよかった。障害児の特殊支援保育者の養成をしているので、その根拠を見出すことができた。

### 3. 建学の精神の継承について

- ・ 建学の精神はよく理解されている。学生のサークルにボランティア団体が多いことにそれがよく表れている。が、将来的には修道者の減少など不安感はある。カトリックセンターの充実などキャンパス環境を整えることで対応したい。
- ・ 信者だけで何とかしようとするのはもう古い。イエスが異邦人の中にある福音の種を見つけ出したように、普通の人の中にある善を見出し、教会がそれに学ぶ姿勢が必要。
- ・ ドン・ボスコの精神を全事業体レベルで継承していくための研修の場が充実している。今年からは各教職員がチェックリストを用いて毎年振り返ることを始めた。そのような精神の研鑽は積んでいるが、現場で子供たちにどれだけドン・ボスコと同じように接していただけるかは難しい場面もある。
- ・ 大学史資料室を設置し、過去の記録をアーカイブ化していくことに力を入れている。

### 4. 特に昨今の情勢を鑑みて、平和についてどのような活動をしているか

- ・ ウクライナ情勢に対し、カトリック校で共同声明を出してもいいのではないかな。
- ・ 武力やお金ではなく、本当の「力」は何か、愛と真理を示していきたい。
- ・ 海外で活躍している修道者たちを通して難民支援をしている。

### 5. 今後、この「集い」に期待すること

- ・ カトリック教育について、高校の校長と大学の学長で語り合う場が欲しい。
- ・ 交流を深めるための懇親会を持ちたい。
- ・ 私学の経営と理念を調和させていく術を示す内容。
- ・ 建学の精神の継承をどのようにしたらいいか示唆を与えてほしい。

## G グループ (小学校校長)

---

### <今回の講演等振り返って>

- ・ IBを取り入れるとしたら、大変ではあるだろう。創立の精神と共存しながらなので、なおの事。
- ・ IBの4-4-4については囲い込みの意識は強い。その通り。
- ・ 他校私学小学校（関西立○館小）は勢いよく4-4-4を敷いたが、色々あり下降線。
- ・ 今の子どもにシステムを合わせられるなら合わせていき、いいものに転換していきたいし、それにカトリック的な視点を含めていくことが必要。
- ・ IBの原点は、普通に全ての教室にイエス像のある国で行うのと、日本とではかけ離れている環境が無視できない。
- ・ IB、MYPがやはり難しいだろう。中学校と小学校の両方の免許を持っている教員が集まっていることもそうだし、理論をみんなが納得し合うのにかかなり大変だっただろう。学習指導要領との整合性も。
- ・ 新しく作られる学校が初めから導入するならば、わかる。地域性もある。受け入れられ、続けられるかどうか。
- ・ 3年後の結果が求められるという未知数の部分もある。
- ・ 私学にとって、入口（入学していただく）と出口（大学進学）の問題は大きい。大学は夢。力をつけ



て欲しいと言っても、それは大学にはいる力であるところが多い。

- 大学を持っている総合学園なら可能。それなら、知識理解の力と、思考判断表現の両方の力がつけられる。ニーズにも応えながら取り入れるという方法かしかないか。
- サレジオの PP にあった、IB の学習者像、ドン・ボスコの姿、ステージの子ども像で、整理された図。
- 願いとするものや、目指すものを見据えて、創立者の言葉や実践を表現した図。そのステージの児童像をしめされる。
- これこそ創立者の言葉が再び蘇ることではないだろうか。
- 加えて、やはり評価の部分の苦労は計り知れない。新しい学力観が出てきてから、現場は明らかに混乱した。

#### <評価>

- 探究心って、高まっているとはどう探っていくのか。様々な情報の得方に、新しくないけど、古いとは言えない方法がたくさんある。(昨日の若松氏) わかったつもりでもそうでない事があるように。
- 全国の小学校 19600 校のうち、IB 一条校は 51 校。(0.2%)
- ただ、評価のやり方はヒントとするには優れた示唆があった。ただ、繰り返しになるが IB の生まれた国と日本の現状を比較すると難しい部分はある。面倒な事を実践する際、何のためにするのかを考えることにより自分で考える力がつくのではとも考えられる。

#### <場の考え方>

- 昨日の山本先生のお話の「場」。その場を共有する中で意識の奥で繋がる、何か通じる、育まれる考え方の核のようなもの、base のようなもの、それが学校という場なのではないか。コロナで登校できない児童がいるがどのように学校へ来る意味を伝えたいか悩んでいたが、場、が key かなと。

#### <読書>

- 読書の時間を続けることによって、つく力。また、読んだ後に、書くことが自分の読みを振り返ることになる。このことから、聞く、読む、書く、伝える、ができる場が、学校であること、それはとても普遍的。学校が学校であるべき価値はここ。探究心の根っこは読書にもある。ネットには色々書いてあるけど、答えてもくれるが、学校の学びとは少しかけ離れている。私の発表したいことはこの iPad に入っていますから、では、おかしい。

#### <男女共学、各校の実態と、別学について共有>

- 男子校から共学になるケース、その逆は、難しい点があるようだ。

#### <コロナを通して見えたこと>

- オンライン、ハイブリッドと様々行ったが、やはり子どもが集まって、目を合わせて一瞬で伝わっていくものがあった。目で繋がる。集まって、話し合うことで、心を通わすことができる。心を通わせることが学校。情報の伝達の場にとどまっているなら、それは学校ではないように思われる。そこにいないと感じられない何か。気。
- しかし、オンライン上でそれまでと違った輝きをした子どももいた。英語の授業で、発音の口や舌の動き等、オンライン画面で個別にチェック出来、効果があった例もあった。今までの方法では、迫れなかったオンラインでの良い面。これはこれからも続けられるだろう。
- IB もオンラインも、子どもの姿から学び、変えられるところは変えていくというのが、結論。
- 同時に、各校の創立者の言葉が新しくないけど、古くなってしまわないようにすることの大切さについては、分科会のいろいろな話題の場において、皆に強く共感瞬間が多くあった。

## H グループ (小学校校長)

---

### <建学の精神をどう伝えていくか>

- ・ バカロレア採用に向けて、建学の精神をもう一度掘り起こし、教員皆で共有していくのは大切なこと。バカロレアに限らず、建物の改築など、何かをきっかけにここに力を注ぐのは大切。四谷雙葉に、年間5回宗教に教員が出て、子どもと同じ視点で受け、子どもと同様に感想も書く。その学びを自分の学級(シスター)経営に生かしていく。学校の雰囲気を変えていく。
- ・ 先生たちが建学の精神を理解していなければ伝えられない。年1回の研修があるが、それだけでは足りない。1年目～3年目までの新任研修として、学期に3～4回、宗教や学園の歴史を話している。その後、養成塾に出したりする。感じて行ってもらうしかない。それを子どもたちに伝えるしかない。ICT研修なら喜んで参加するが、建学の精神等のテーマには積極性に欠ける教員がいることもある。
- ・ 九州に養成塾はない。宗教部が中心となり建学の精神をもう一度考えていく一つの作業として、「7つの習慣(もともとはビジネス書)」から一つひとつの教育活動を見つめ直していくという作業を始めた。
- ・ 2週間に1回、校長が子どもたちに話す(講堂朝礼の時)。「お友だちを大切に」この目標にすべてが含まれている。これを「十の価値」に分けて考える。(5年前修道会から来た)子どもに話すのは難しいテーマでも、子どもの捉え方は豊かで、逆に教えられることも多い。年齢差はあるが、真剣に考えてくれる。シスターが1人いらっしゃるので、どうつたえるかというヒントをくださった。「十の価値」を1年に2つずつ話していく。週番(6年4人)の役割...朝のあいさつ、解錠・施錠、校長先生の話の聞いてすぐ子どもたちの前でまとめて話す、講堂朝礼の司会
- ・ 金曜日が神父様のお話の宗教朝礼。
- ・ 校長の話、各学年、学期に3回ずつ。そこで建学の精神を踏まえて子どもたちに話す。朝礼の祈りを教員が輪番で行うが、それが学校の風土を作っていると思う。
- ・ 歴代校長が続けてきた話を朝礼で行う。

## I グループ (総長管区長)

---

### 1. 自己紹介の中から出てきた問題提起

- ・ シスターが一人もいなくなった学校において「設立母体」の役割は何かを考えている。
- ・ 学校にはシスターが一人もいなくなった。今の後継者はよくやってくれているが、この後どうなっていくかという懸念を抱えている。
- ・ 学校法人に対しては法的には修道会が何かの強制力をもたせた指示をすることはできない。それでも、カリスマにそった運営ができるように何かしら関わりをもっていくことが必要だと思う。
- ・ 日本にいる外国にルーツをもつ子どもたち(高校生の年代)の教育の道を模索しているが、文科省との関係などで実現へのハードルが高い。

### 2. 今回初めて参加した方の感想、印象(1名)

- ・ 司教様方の参加もあり、それを見ていると、日本のカトリック教会において、ミッションスクールはまだまだ力強いものを感じた。では、カトリック教会の中のミッションの場として、これからどのように影響力のある存在として続いていくことができるのか、ということを考えさせられる。

### 3. 講話、事例報告から感想や考えたことなど

- ・ 地方の学校で、実際に子どもが少なく入学者も減。生徒募集に力を入れるが、そのなかでは「いかに成功する人を育成するか」ということをPRしなければならない。アイダル神父様の講話を聴きながら葛藤がある。大変参考になる話だったが、現実的に子どもたちの育成において落としていくには難しさもある。

- ・ 一貫教育であるが、幼稚園→小学校、小学校→中高に上がるためには「試験」や「内申」があり、必要な条件に満たない場合は落としているのが現実。人を育てるといいながら、やっていることに矛盾があると感じた。学校の姿勢自体、根本的にやり直しが必要で、先生方を巻き込んでいく大きな作業となるが、それをしないといけない。最近のこの研修は、司祭、修道者中心ではなく、先生方が中心になって動いていることが見えて、以前よりもっと広がりがあることを感じた。
- ・ もともと教育を使命としているが、歴史のなかで、「エリート学校」とか「金持ちの人の大学」というイメージがついている。その矛盾は悩ましい。大学教授になるには、昔は会員を優先することができたが、今は会員であってもレベルに達していないと受け入れることができない状態である。日本の教育制度には、実際の子どもたちの教育のためには無理があると思う。例えば以前、大学の授業は90分だったが今は100分行わなければならない。先生も学生もますます余裕がなくなっている。ボランティア体験などを入れようとしても、通常の任務プラスでやらなければならないので、どうしたものかと悩む。学校の中に会員の姿がなくなっていく中で、カリスマに基づいた使命を果たしていくために、ますますどうしたものかと悩む。
- ・ アイダル神父様の話に強い感銘を受けた。何を大事にしないといけないのかが明確に見えた。世の中は進路実績重視だがカトリック学校の存在価値は違う。これまでも「一人一人を大事にする」「平和に貢献出来る人を育てる」など人間教育は意識していたが、どうしても進路実績などに向いていた。「決然と弱者を擁護する」これをカトリック学校の使命として、社会にアピールできるようになりたい。「共に生きるわずらわしさ」「面倒くさい人間関係」を味わい感じながらでも共に生きる体験を続けていくとき、子どもたちは成長していくことを確信した。
- ・ 生徒数確保という切実な課題と向き合い学校改革を行った。そこには先生方の並々ならぬ頑張りがあった。それにより初年度は生徒数確保が実現した。しかし、継続的にその状態を保っていくには、さらに先生方の努力と苦労が求められる。この社会の中で学校を存続させていくということは大変なことだと思う。けれども、日本の教会なかでカトリック校は、大きな宣教の場であり、社会が求めることだけに流れず、講師方のお話にあったようなカトリック教育の失ってはならない部分を大事にしながらいかに進んでいかなければならない。
- ・ 「カトリック学校は一校もなくしてはならない」と言っている人がいたが、日本の社会の中でカトリック校は大きな宣教の場だと思う。
- ・ 修道召命について
  - 学校にはたくさんの子どもたちがいる。その中で、一人でもいいから修道召命の道を選んでいけるようにするためにはどうしたらよいか...
  - 修道召命に気づかせる取り組みが必要。
  - 召命の種はあっても継続的に関わり育てることの難しさが大きい。
  - 子どもや若者が修道召命一度関心をもったとしても、召命のための働きかけを継続していかなければ、いつのまにか消えてしまう。働きかけの方法も大事。
  - 幼稚園の子どもへの働きかけは大事だと思う。幼児の心には神様のセンスがあり、幼ころに訴えるものは大きい。このあたりで、ご自身の体験談がいくつか分かち合われた。
  - 今の高齢の修道者たちの中には、戦争の苦しい体験が人生の転換点になっていったという方も多い。今は、なんとなくどうにかなっていくというような時代で、転換点となることとの出会いがなく生きているという場合が多い。その人の人生の中で何か起こったときに、頼れるものを見出したいというところから修道召命につながっていくことがあるのだろう。生き方を考え直させるチャンスを受けかけてみる、また極限の状態の体験をあえてさせてみる、ということも良いのではないか。

などなど、新しい召命が生まれるためには...ということに集中してざっくばらんな話で盛り上がった。弱い人を排除していく日本、例えば難民を受け入れない国日本のあり方についての話が盛り上がったところでグループトークの時間終了。

## J グループ (理事長など)

---

### <IB について>

- ・ 中教審に入っていらっしゃるのはある意味心強い。
- ・ 官僚、政治家の質が落ちているのではないか？
- ・ 学校法人のガバナンス、特に高校法人以下の評議員会の位置づけが心配。
- ・ 評議員会が外部だけになれば、建学の精神を守れない・
- ・ 建学の精神を守り育てるためには、IB の例を挙げて、ドン・ボスコの生き方を振り返って、現代的な学習目標を設定しているのはよかった。
- ・ 文科省は、高校に普通科のコースを認めながら、カリキュラムは学習指導要領で締め上げているのは問題。
- ・ 文科省は IB を勧めながら、学習指導要領との関係は曖昧。IB で入学できる大学の状況は今日評されていない。現在まで朝令暮改が多く、安心できない。
- ・ IB の単位認定方法は不明、疑問。進めるのは困難が伴う。
- ・ IB のコスト負担に耐えられるか。
- ・ IB の文化が日本人のメンタリティーに合っているか。
- ・ 保護者などのクレーマー、SNS からの保護
- ・ IB のライセンスが上級学校（大学）でどう生きるのか？

### <対談について>

- ・ スコラ哲学を掘り起こした山本先生。カトリシズムの普遍性を理解し、納得できた。
- ・ 若松先生のお話しにも、カトリックの良さを熱く語っていただき、力づけられた。昨年と比較して柔らかな印象になった。
- ・ 「人材」は内閣府が支持し、文科省が具体化している。

### <基調講演について>

- ・ 教皇フランシスコの発信は、神学的というよりも具体的な社会事象に即したものとなっている。決然と弱者を擁護する者、痛みを解放する人、それを見直す人。

## K グループ (理事長など)

---

### <今回の学び>

- ・ カトリック学校の使命、意義、意気込み、つながりを改めて感じた。共通して橋をかけ合うことが大切。
- ・ 教皇フランシスコの話がやすらぎ、心に響いた。「新しくないが古くはならない」新鮮であり、深いと感じた。「人材ではなく人間を育てること」自分の考え、行いと合致した。再確認できた。バカロレアに札幌聖心は研究校として参加したことがある。内容的には素晴らしいが経営とのバランスが難しく、縛りも多い。
- ・ 「人間を育てる」カトリックの原点であり、私たちの使命。理事長がカトリック信者でなかったらという視点を改めて考える必要がある。
- ・ 教育の原点、人間として生きるという原点を改めて学び直す時であった。
- ・ 「決然と弱者を助けること」が教育ということが、最も心に残った。「決然と」が特に。「新しくないが古くはならない」という言葉から、伝統の大切さを私たち自身が改めて考える必要性を感じた。

### <これからの時代の中での在り方>

- ・ いい学校だけでは生徒が集まらない。内部改革を行っている。修道会だけに頼ってはいけない。継続し続けていきたい。見学の精神、理想を高くとは考えているか、現実には厳しい。純心教育部を創り、聖書の言葉、純心の精神を伝え続けていく努力をしている。
- ・ シスターが理事長職でよいのか。経営的な視点が必要だと思う。理事長の資質も大切。当学園に男女共学が合うかどうか。
- ・ 昭和 23 年開学。カナダからきた男子校。神父やブラザーが数年前に去られた。○年会 カトリック信者 5 名から 3 名に減らした。神父様を招くのが難しい。なり手がいない。生徒は集まっているが、精神的に弱い子が増えている傾向がある。現役志向が強くなった。
- ・ 縁があり、プロの経営者として関るようになった。ミッションスクールの使命を改めて認識し、大切にすべきこと（不変）と変えるべきことを考え、経営からスタートした。
- ・ エキュメニカルな学校になってもよいのではと考えている。シスターがいないので、理事長は大阪教区の司祭が就任した。関西の女子校で最も早く共学化し、7 年前に通信制を開始した（赤字だが作ってよかったと思う）。通信制—メディア視聴を認めない。スクーリングが大切。高校生らしい高校。宗教教育を大切にしている関西学院大学（プロテスタント）と提携、理系に 70 名の枠をいただく。

## L グループ（理事長など）

---

### ①次回以降のテーマ、今回の感想など

- ・ 今回の集いは新鮮で大変良かった。特に、学校の経営者として参考になる点が多かった。責任者だけでなく、教員の先生方にも聴いてほしかった。
- ・ IB 教育について知らなかった点が多かったが、具体的でとても参考になった。
- ・ 理念的な部分と経営的な部分、バランスよく配されていた。
- ・ 次回以降の事例として、IT 教育に優れたカトリック校の紹介。
- ・ 存続の為に工夫をしているカトリック校の例を知りたい。

### ②建学の精神について

- ・ ミサや宗教の授業を行っているだけでカトリック校というのではなく、カリキュラムも（すべての授業も）、活動も建学の精神に根差したものでありたい。
- ・ 建学の精神の文言もさることながら、目には見えない雰囲気も大切なカトリック校の宝。

## M グループ（理事長など）

---

### 1. アイダル師の講演について

- ・ 苦しみと幸せは双児である。人生と同じ。簡単ではないが十字架が必要。自分を相手より低くする。最後の晩餐、犠牲がなければ本当の恵みがない。
- ・ 学生は「楽しみ」ばかり求める。彼らに、楽しみだけの世界に本当に楽しさはあるのか？他人の存在なしに、自分の存在もない。社会に役立つ人間として、自分の立ち位置が明快になるだろう。
- ・ 他社の為に他者と共に。同じものを感じて心強く思った。
- ・ 話の節々に、イエズス会的アプローチを感じたが、一般人にも分かりやすいアプローチだった。
- ・ 自分の考えを持たない人は、他人の考えにのる—声の大きい人に引っ張られる。各々の深みが必要。

### 2. 対談から

- ・ 伝統を動かす、伝統で新しい伝統を作ってゆくのがその意味と理解している。ただ守っていくだけで

はない。枠は必要だが、自分らしさを出すには新しい伝統は必要。形と本質をまちがわないように。イタリアでは、ろうそくを立てれば「今日の祈り終わり」と。本質とは何か。

- ・ お二人の話の共通部分は何か。そこにカトリック学校らしさ、伝統があるのでは。

## N グループ (理事長・大学学長) / オンライン

---

- ・ カトリックということを確認を持って伝えることが大切であろう。しかし、それをどのように伝えるかとなると難しさを感じている。
- ・ カトリック教育が幼稚園、小学校、中学校、高校、大学と続いており、その連続性は意識すべきことであるように思う。
- ・ 幼稚園におけるカトリック教育では居場所がある、自分が受け入れられているという感覚をもつことが何よりも大切だと感じている。
- ・ 人材という語を批判的に語った若松先生の言葉が印象に残っている。
- ・ 効率に即して色々と考える教員、あるいは社会人になって困らないように指導しようとする教員は多い。
- ・ 公立学校で校長を経験した校長がカトリック学校の校長につく場合は、文科省の意見に対しては盲目的に従うという傾向が強い。
- ・ 逆に公立学校の状況や立場についてはカトリック学校ではわからないことが多いのではないかと。
- ・ 一般企業に務めていた経験があるが、逆にカトリック的なものを求められていたことを覚えている。
- ・ やはり地方では、IB とかではなく、公立が強い。カトリック学校の教員がこのような場を通して幼稚園や小学校、大学なども含め、色々な立場の人と出会うことは大切なことであるように思う。
- ・ 最近の傾向では学校がより閉鎖的になっているように思うが、逆に学校が出向いていく必要があるように感じている。それはカトリック教育の原点に立ち帰るという仕方で、何が大切なのかを識別しなければと思う。特に山本先生の「伝統は動く」という言葉に励まされた。
- ・ 最近のカトリック教育の中で印象的な動きはオンラインを通してのつながりや広がりである。Salt のように新たな刺激的な企画もあるし、他の学校とオンラインを通して企画を共同で実施することもできている。相手を信頼したら何かが帰って来るという感覚がある。
- ・ これからよりいっそう大切になってくるのは、建学の精神を共有できているかどうかではないか。ミサがあるから、宗教行事があるからといって建学の精神を共有しているとは言い難い。しかし、他方では校長として、進学等の数が問題となることもあるというジレンマがある。
- ・ 印象に残ったのはアイダルの決然はっきりとした覚悟のような感覚であった。自分の中でのある種の覚悟をしないとイケない。特に、平等だから大丈夫という観点ではなく、自分が一番下というキリスト教的価値観、他者が自分よりも上という他者のヒューマニズムはとても響いた。
- ・ 自身は校長職と理事長職をかねているときもあり、様々な試みをしてきた。その中で意識してきたのは学校を固定的なものというよりも動くものとしてとらえ、実際に動かしていくことだった。動かしていくことができないと、学校が世の中にどのようにつながっていくことができない。特に IB 教育を導入するときは、カトリック学校として IB を取り入れたかった。IB はヒューマニズム教育、特に言語教育であり、人格形成の基礎としての言語認知の深化を生徒に体験してほしい。
- ・ 理事会、理事長として経営を考えると、人件費比率には気を配っている。70%を超えると経営が厳しい。ただ、学校法人は教育内容がわからなければ効果が現れないため、理事会はその教育の内容についても把握すべきである。
- ・ カトリック学校の理事長職等は教育経験のない教区司祭がなるべきではないと感じている。やはり教育経験のある人物をしっかりと養成し、経営サイドを育てるということを意識しなければならない。
- ・ 学校の中には色々な考え方があって当然であり、統一すべきではないが、結論としてどのようにもつ

ていくのかという点に関しては運営も経営も大切に考えなければならない点だろうと思う。

- ・ 学校を運営する際のルールや、お金の采配や意志決定には基盤となる価値観があるが、残念ながら、スピリチュアルなところにまで議論にならないところがある。

## 0 グループ（小学校校長）／オンライン

---

### 参加して感じたこと

- ・ シスターが学校で激減、カトリック校として使命をつなぐの意識している。国際バカロレアの話聞いて、雙葉には2つのコースがある。それぞれ、ゴールが異なり、独自の宗教教育ができない。この2つのコースの融合の可能性を感じた。目指す学習者像、具体化できていないが、創立者の理念を残したい。
- ・ 創立者の理念を大切にしていながらも現実が結びついてない点があった。これを結び付けるヒントを頂けた。アイダル神父からメッセージを頂いた。
- ・ 東京にいるのにもかかわらず、昨日のサレジオ関係の集まりがあり、オンラインとなりました。特にうちの学校は国際バカロレアについて面白いと思った。環境や現状から言えば、昨日のお話によって、原点に戻ることができた。いいなあ、頑張ろうと思いました。毎回出席すると頑張ろうとなるが、そのあと何をやっているのかと言うと、なかなか難しい。毎回、毎回反省するのだが、うちの現状に合わせた取り組みとカトリック全体としての取り組みの両方が必要だと思いました。

### 今回のテーマ、新しいカトリック教育の可能性について

- ・ いかにかシスター達がいなくなっても、研修と結びつけて、分かりやすく教員に伝える使命と必要を感じた。
- ・ 何と何に橋を架けるのか、一致点、聖心の教育と教育改革の部分が重なっている部分をもっとありそうだと感じた。すでに模索しているのをもうちょっと進められる可能性がある。聖心の文献をどのように重ねられるのか。修道会で受け継いでいるものは沢山あり、本質は同じながら、表現が古い。そのもっていた宝をもっと生かす方法があるだろう。創立者の生き方をどのように引っ張り出すのかを考えた。また、アイダル先生の話を知って、大学進学の実績がどうしても求められており、カトリック教育は役に立つのかと問われている。この2年間、コロナ禍で学校での活動が思うように出来ず、結局生徒のあまった時間は全部時間を塾に取られてしまい、毒されてしまった面もある。もっとカトリックの良さにおいて人を育てる、アイダル神父様の生き方のように示すこと。アイダル神父から当たり前でしょと伝えるのと同じようにいかないのだが、もっと世の中に大事な事を伝える必要を感じた。伝えたいことをもっと伝える。蛇のようにさとく、この世の力に打ち負かされないようにすること。
- ・ アイダル神父の講演で、学校での取り組みで、カトリック学校では神様から愛されていると、どこでも言われている。そのように自己肯定感を高めるようにとすることは半分で、出発は他者への責任、かわることで人間として正されてゆく、価値観が生まれるとの言葉が印象に残った。そして、その取り組みが奉仕活動、縦割りの活動と言える。

### グループへの質問

- ①他校では他者への取り組みとして何をしているのか。
- ②またシスター神父が少ないので共有する上で、神様を真ん中に、神と共に歩むために、職員に対してどのような研修をされているのか知りたい。

- ・ 校長になって2年。勉強になった。久しぶりに落ち着いて勉強した気持ち。国際バカロレアは聞いたことはあるが、実際は良く分からないので、分かりやすかった。カトリック学校の建学の精神と共感能力を持つことなど、重なることがあった。

### グループへの質問にえて

- ①他者に向かう、特別なことではない。校長となって9年目なのだが、それまで中高だったので、小学校に来た。小学校は何と大変なことなのかと思った。他者に向かう人を育てるには、小さければ小さいほど入ってゆくだろう。幼稚園、小学生もやり方次第だろう。例えばケンカをしました、そのような時に、お互いが相手はどう考えたのかを教員が入りながら考えること。日常の中で、学ぶことが通常だろう。それに加えての奉仕活動などのプログラムを通して学ぶことが必要。お隣に老人ホームがあるので、行きたいなあ。コロナ前には隣の老人ホームへ中学生がハンドベルの演奏に行ったことがある。
- ②年度初めの小中校の合同職員会議。その時に今年度の司牧的な目標を説明するのだが、その時と職員会議にドン・ボスコのやり方を説明するようなことでしょうか。宮崎日向学院にいた時には、信者でない先生方から月例ミサをして欲しいと言われて行っていた。それまでそれをしていなかったのに、希望者と言ったのに、土曜日に生徒全員参加の月例ミサをやるようになった。ある一人の先生の発言から始まったことがある。先生方から出て来る、どうして？それは分からない。また、週3回ぐらい、朝の心というHRの放送をしていた。先生方全員でやってもらう、生徒は先生たちの授業の姿しか知らないのだが、色々な話をしてもらうことで、普段聞けない話を聞いたのが良かったと思う。福岡雙葉では通信を出していると聞いたのだが、ちょっとした先生方の話をちょっと載せるだけでも良いのではないかと。
- ②神父様のような方から語られる言葉。雙葉としては、コロナの前までは小学校中学校で神父を読んで話を聞く機会があった。教務主任の信者の先生が教務通信という形で宗教的な話を配信もしている
- ①大きな行事も大切なのだが、日々の生活の中でのトラブルをどうやって乗り越えて行くのか、身近な平和を築くこと。他者に対して譲る、我慢することができる子が減り、親も自分の子に害を加える子を攻撃するような風潮もある。子どもたちには相手の気持ちになって考える、共感することを育てるのは大事なスキルだと思う。路上生活者と難民を同じだと思っている子がいたことにショックを受けたことがある。校訓でもあるグローバルシチズンを育てるために、要らなくなった子ども服を送る、6年生をアフガンへ送るようなことを少しずつ取り組んでいる。
- ①人とかかわりを作るのは大事だと考えている。東京の私立学校で受験して入学してくるため、人と競争するのが当たり前。それを考えることの大切さを感じる。人のためにするのは当たり前という文化を作りたい。中高生になると奉仕活動は行事になっているが、小学校はそこまで行かない。年3回おにぎりにするぐらい。段々とそれをやるのが当たり前になってくる。身の回りのことも大事にしたいので、遠くの話をした後は必ず身近な話題にしている。休みの前には3つのありがとう、ごめんなさい、どうぞの言葉の大切さを必ず伝えている。
- ②先生方には、宗教研修と言って神父様を呼んで、話を聞く機会がある。子どもたちの朝礼を考える時に、信徒の先生方が自ら考えて行っている。当番の先生には重荷でもある。先生方とかかわりの中で大切にしているのは、学年団とかかわる時に伝わるものがあると思う、その中で個人的なことをシェアする。中間考査の会議の時にはいつもお祈りして下さいと頼まれる。そのように成績会議の前に祈る雰囲気がある。そのお祈りを頼まれるのは大変でもあるのだが、それが必要だとも思っている。

### これからの「集い」に期待すること、扱って欲しいテーマなど

- ・ 昨日の貴重講演、録画されたものがあれば、一緒に聴きたい。この内容を職員で分かち合いたい。
- ・ 対面で是非続けてほしい、内容についての希望はない。とてもありがたい。
- ・ カトリック学校として何を大事にしてゆくのかを気づきを頂ければと思います。IBの話においても古いものが新しい。古くならないものがある。会場とオンラインとハイフレックスで。



- ハイブリットは有難い。話し合いも出来るし、お目にかかりたいが、この形を残して欲しい。橋と橋、カトリック学校同士の繋がり、共有すること。お互いに共有してゆくこと、強め合ってゆくこと。一校だけが学ばば良い。一生懸命でもあるが、姉妹校の継続が難しい中で、支え合うことで全体像を伝える場を作って行く。
- 講演会と対談の映像が欲しい。一人で出たのがもったいないな。配信して欲しい。ご意見を聞かせて頂いてよかった。
- 道徳との兼ね合わせるのか、組み立てることができるのか。道徳と神様の両方が大切なのではないか。
- ドン・ボスコの話が今回は結構出て来たのに、本家がこれではダメだと思わされた。ことばという意味で、今の日本に必要なことばが必要である。やっぱり古い。ドン・ボスコの言い換えないとダメだ。使用暫定版のリーフレットを作成した、それを元にやっている。